

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770006

研究課題名(和文) 経験的・非経験的アプローチを総合した民間心理学の社会的機能の分析

研究課題名(英文) Social Functional Analysis of Folk Psychological Concepts by the Synthesis of Empirical and Non-Empirical Methods

研究代表者

笠木 雅史 (Kasaki, Masashi)

京都大学・文学研究科・研究員

研究者番号：60713576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、民間心理学研究における伝統的な非経験的方法と最近の経験的方法を総合しつつ、民間心理学の機能を分析することである。特に、この方法論的見地から、従来の民間心理学研究で常に想定されてきた、「民間心理学の機能は行動の予測と説明である」という考えを否定し、「民間心理学には規範的機能も含まれる」という考えの検証を行った。その結果、「意図的に行為する」、「知っている」については、規範的機能を持つと見なすための実証的証拠がえられた。また、一部の機能は英語圏の先行研究とは異なる日本語固有の特長が見られた。

研究成果の概要(英文)：This research aims at analyzing the functions of folk psychology by synthesizing the non-empirical method of philosophy and the empirical method of psychology. Using the synthesized method, the research attempts to examine, in particular, the hypothesis that folk psychology includes normative functions, and to falsify the hypothesis that it only includes predictive and explanatory functions. As a result, empirical evidence has been acquired that "intentionally acting," "knowing," "trusting" have normative functions. In addition, it has been shown that they behave differently between English and Japanese.

研究分野：人文学

キーワード：民間心理学 意図的行為 知識 信頼 Knobe効果 副作用効果 概念の社会機能分析

1. 研究開始当初の背景

他者に心的状態を帰属することによって自分の行為を決定するということを、我々は日常的に行なっている(例えば、恋人がプレゼントを欲しがっているので、何か買おうと決定するなど)。他者の心的状態を読み取るために我々が用いている知識・能力は、「民間心理学」と呼ばれる。民間心理学は哲学、心理学、認知科学、人類学など多くの分野で研究されているが、これらの分野の民間心理学の研究は全て、「民間心理学は行動を予知、説明する機能を持つ」という想定のもとで行われてきた。近年、この想定を批判し、民間心理学の持つ、規範的、倫理的機能を強調する2つの運動が独立に起こりつつある。

1つの運動は、心的状態を表す言葉を分析するという伝統的な分析哲学の非経験的方法を用いるものである。この方法に基づき、例えば、民間心理学を用いて心的状態を帰属することで、行動の正当化が行われるという指摘や、行為を理解可能にする文脈を作り出すことで、行為を標準化しているという指摘が行われている。こうした論者の近年の見解は、例えば、D. Hutto et al. (2007) *Folk Psychology Re-Assessed* という論文集にまとめられている。

もう1つの運動は、社会心理学の手法を哲学に応用する、伝統的な分析哲学とは全く異なる経験的方法を用いる、「実験哲学」と呼ばれる新しい分野から起こった。実験哲学は、心理学実験によって民間心理学の内実を調査する。それらの実験の成果から、従来とは異なる見解が次々に生まれている。例えば、ある行為に対する意図の帰属がその行為の良し悪しによって影響をうけるという、いわゆる Knobe 効果が、J. Knobe によって 2003 年に発見された。他にも、心的状態の帰属が道徳的責任に関する判断と影響しあうという実験成果が報告している。

これらの民間心理学研究についての再考運動は、国内には未紹介であるものの、国外では大きな注目を集めている。しかしながら、両者は方法の相違から相互に参照し合うこともなく、独立に展開されていた。両者は従来の研究の批判として同一の方向性を示しており、民間心理学研究を新しい方向へとさらに進展させるためにも両者を統合する方法論を確立することは急務であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、民間心理学研究の近年の新展開における、言語分析などの非経験的方法と、現実の被験者に心理学実験を施すことで行われている経験的方法を総合しつつ、行動の予知、説明に関わる以外の民間心理学の機能の内実を検討することを目的とした。より詳細には、本研究は以下の2点を明らかにすることを目的とした。

(1) 近年の分析哲学、実験哲学における民間

心理学に関する新たな諸研究は、その表面上の方法の相違にもかかわらず、民間心理学の社会的機能の分析という同一の方法論に属するものとして統一的に解釈可能であり、これらの諸研究が方法論的に統合可能であることを明らかにする。

(2) これらの諸研究を統合することによって、行動の予知と説明を行うという機能に加え行為の正当化、標準化、行為に対する責任の帰属といった様々な規範的、倫理的機能を、民間心理学的概念は持つかどうかを非経験的、経験的方法の両者を用いつつ検証する。

3. 研究の方法

本研究は民間心理学についての非経験的研究と経験的研究の研究の総合として意図されていた。しかし、研究を着想した時点では経験的研究を行うための知識が十分でなかったため、あくまでも心理学や実験哲学の先行研究を参考にしつつ、言語分析と組み合わせることで総合的研究を行う計画であった。その後、実験経済学、社会心理学を専門とする研究協力者の助力により、実験を実施することができるようになったため、本研究の方法は、以下の非経験的、経験的方法の2つを含むものとなった。

(1) 非経験的方法：従来の哲学で行われていた言語分析の方法に基づき、民間心理学に属する心的状態を表す言葉の適用条件を調査する。より具体的には、その用語の適用条件が他の用語の適用条件とどのように関連するのか、また可能な反例を検討し、一部の条件を追加するのか、あるいは削除するのかを検討する。

(2) 経験的方法：民間心理学に属する心的状態を表す言葉を含む我々の判断が、どのような条件によって変化するのかを、心理学実験の方法により調査する。特に、それらの判断の変化が規範的なファクターと関連しているかどうかを調査することで、民間心理学が規範的機能を持つかどうかを検討する。

4. 研究成果

本研究で検討した民間心理学に属する言葉は、主に「意図的に行為する」、「知っている」、「信頼する」である。民間心理学の語彙は非常に多いため、ある程度限定せざるをえなかった。以下これら3つの民間心理学の言葉についての研究の成果をまとめる(本研究では副次的に、言語コミュニケーションにおけるコミュニケーション意図の判断についても研究を行ったが、割愛する)。

(1) 意図的に行為する：意図的行為についての判断は、その行為の結果の良し悪しによって変化するということは、J. Knobe (2003) “Intentional Action and Side Effects in Ordinary Language”によって発見され、Knobe の名前とって Knobe 効果と現在呼ばれている。この Knobe 効果は英語圏以外の国での実験でも再現されており、非常に強固な心理メカニズム

であるとされている。Knobe 自身はこれをもって、民間心理学、特に「意図的に行為する」という言葉の意味に、すでに結果の善し悪しを示唆する規範的要素が含まれていると考えている。まず本研究では、「意図的に行為する」という判断に対する Knobe 効果が、日本語話者にとっても生じるという実験結果をえた。この実験結果は数回追従実験を行ったがすべて再現されたため、強固なものである。一連の実験では、さらに以下の成果がえられた。まず、従来の英語での先行研究で報告されているのとは異なり、日本語では道徳的な良し悪しよりも、慣習的規範、共同体規範を順守する・違反するという意味での良し悪しの方が「意図的に行為する」という判断に対する Knobe 効果に大きく影響する。規範的要素が「意図的に行為する」という言葉の意味にすでに組み込まれているという点で Knobe が正しいならば、同様のことは英語だけでなく日本語に対して妥当することになる。しかし、「意図的」という言葉の意味については、現在複数の意味があるのではないかという説など、Knobe の考えに対する非経験的方法による分析に基づく批判も多いため、今後この点を更に検討することが課題となる。

(2) 知っている：「知っている」という判断に対しても結果の善し悪しに左右される Knobe 効果が生じるということは、英語圏で確認されている。しかし、日本で実験を行ったところ、道徳的な良し悪しは「知っている」という判断に対する Knobe 効果を引き起こすが、慣習的規範、共同体規範を順守する・違反するという意味での良し悪しは引き起こさないという結果がえられた。この結果をどう解釈するかは今後検討されなければならないが、最も単純な仮説は、日本語では、「意図的に行為する」とは異なり、「知っている」には、その行為の結果が良いか悪いかという規範的要素が意味として含まれていないというものである。これは従来の非経験的な「知っている」の研究と一致した仮説であり、経験的方法による調査が非経験的な方法でえられた主張を支持しているとも考えることができる。

(3) 信頼する：「信頼する」という判断は、非経験的、経験的方法の両方を用いつつ、哲学、心理学、社会学、経済学などの多様な分野で研究されている。しかも、それらの研究は相互に独立して行われており、総合を行うのは困難に思われた。しかし、これらの研究を詳細に検討した結果、「信頼する」に対して提示された適用条件は「自分のためになる行為を相手がするという予測」、「その行為をする相手の動機が相手の自己利益からではない」といった共通要素を持っていることが分かった。また、経済学、ロボット工学などの分野で信頼を増大するとして研究されているファクターも、この適用条件と合致するものだと解釈可能であると考えていることがで

きるという結果もえられた。したがって、信頼についての経験的、非経験的研究を総合することに対して一見の見込みがえられた。今後はこの考えに基づき心理学実験を行い、さらに両者の総合の方向性を実証的に検討する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

[学会発表] (計 16 件)

① Masashi Kasaki, Hiroko Kamide, Takashi Ikeda, Individual Knowledge and Common Knowledge in Japanese, International Conference on Ethno-Epistemology - Culture, Language, and Methodology, Kanazawa (石川県・金沢市), 2016年6月5日

② 笠木雅史, 日出る国の住人は本当に記述説支持者なのか?, 第 8 回応用哲学会, 慶応大学 (東京都・港区), 2016年5月7日

③ 笠木雅史, ロボット倫理と安心社会, 安心安全社会システムシンポジウム 2015, 大阪大学 (大阪府・豊中市), 2015年12月18日

④ 笠木雅史, ロボット倫理と信頼研究, 第 7 回安心・信頼・技術・研究会例会, 大阪大学 (大阪府・豊中市), 2015年12月10日

⑤ Yu Izumi, Masashi Kasaki, Yan Zhou, Sobei H. Oda, Definite Descriptions and the Alleged East-West Variation in Intuitions about Reference, Buffalo Annual Experimental Philosophy Conference 2015, State University of New York, Buffalo (イギリス), 2015年9月12日; American Philosophical Association Central Division Meeting 2016, Chicago (アメリカ), 2016年3月4日

⑥ Masashi Kasaki, Philosophical Reflections on Trustworthy Machines: What is It to Trust Machines?, Workshop "From Temporal Interactions to Sustainable Relationships, IEEE RO-MAN 2015, Kobe International Conference Center (兵庫県・神戸市), 2015年8月30日

⑦ Masashi Kasaki, Yu Izumi, Yan Zhou, Sobei H. Oda, Reference and Cross-Cultural Differences: What is Asked in the Cross-Cultural Studies of Reference?, Queen's University Belfast (イギリス), 2015年8月12日; Taipei - Shanghai Intercity Workshop in Philosophy, Soochow University, Soochow University (イギリス), 2016年4月19日

⑧ 和泉悠, 笠木雅史, 周艶, 小田宗兵衛, 実験哲学と言語哲学: 確定記述と作られた文化的差異, 2015年度哲学若手研究者フォーラム、国立オリンピック記念青少年総合センター (東京都・渋谷区), 2015年7月12日

⑨ Masashi Kasaki, Yan Zhou, Sobei H. Oda, The Knobe Effect in Japanese: How Intentionality Judgements are (not) Affected by Cultural

Differences, 6th Conference of Experimental Philosophy Group UK, University of Nottingham (イギリス), 2015年6月30日 (ポスター発表)

⑩Yan Zhou, Masashi Kasaki, Sobei H. Oda, The Knobe Effect Reconsidered: Uncertainty, Expectation and Relativity in the Judgment of Intentionality, 6th Conference of Experimental Philosophy Group UK, University of Nottingham (イギリス), 2015年6月29日

⑪Yan Zhou, Masashi Kasaki, Sobei H. Oda, An Experimental Economics Approach to the Knobe Effect, Society for Computational Economics - Computing in Economics and Finance, Taipei (台湾), 2015年6月21日; Consciousness and Intention in Economics and Philosophy, Kyoto Sangyo University (京都府・北区), 2015年12月13日

⑫笠木雅史, 信頼性、安全、機械, 第11回日本ロボット学会安心ロボティクス研究専門委員会, 大阪大学 (大阪府・豊中市), 2014年12月1日

⑬Tora Koyama & Masashi Kasaki, Creating New Waves in Philosophy of Trust, 2nd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, Kyoto University (京都府・左京区), 2014年8月28日

⑭Fabio Dalla Libera, Masashi Kasaki, Yuichiro Yoshikawa, Tora Koyama, Trust and Artifacts, Robo-Philosophy 2014 – Sociable Robots and the Future of Social Relations, Aarhus University (デンマーク), 2014年8月22日

⑮笠木雅史, 信頼と責任: 信頼の認識論的、倫理的次元, 第3回安心・信頼・技術・研究会例会, 大阪大学 (大阪府・豊中市), 2014年7月31日

⑯笠木雅史, 信頼の哲学, 心理学的分析から考える人工物の信頼性, 平成26年度第1回社会知能研究会「人とモノとの間に生起するコト: 工学と哲学の視点から見える問題」, 大阪大学中之島センター (大阪府・大阪市), 2014年7月2日

〔図書〕 (計 2件)

小山虎 & 笠木雅史, ロボットを信頼できるか, 新井健夫 & 上出寛子 (編), ロボット幸学, 近刊

Fabio Dalla Libera, Masashi Kasaki, Yuichiro Yoshikawa, Tora Koyama, Trust and Artifacts, In Johanna Seibt, Raul Hakli, Marco Nørskov (eds.), *Frontiers in Artificial Intelligence and Applications, Volume 273: Sociable Robots and the Future of Social Relations*. Amsterdam: IOS Press: 231-240, 2014年12月.

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
笠木 雅史 (Masashi, KASAKI)
京都大学・文学研究科・日本学術振興会特別
研究員 PD
研究者番号: 60713576

(2) 研究分担者 ()

研究者番号:

(3) 連携研究者 ()

研究者番号: